

山梨大学工学部 学生員 岩本 尚
 山梨大学工学部 正会員 砂田憲吾
 建設省甲府工事事務所 松崎 実

1.はじめに

河川区域内の植生は流況に直接関与しながら、その一方で多様な生物に棲息場を提供するなど河川環境の基本的な条件を構成している。その河川植生を将来とも河川の重要な河道要素・環境条件と認識し、中長期的な河川植生の存在状態を出水規模や頻度および河道特性との関係で予測し評価する方法を確立する必要がある。本研究では、河道特性がどのように植生域の消長に関与してくるのかを明らかにするため、富士川水系の上流部である釜無川とその支川である笛吹川を対象として、植生分布と河道特性との関係を見いだすこととした。前の研究¹⁾では植生分布を航空写真からの判読によったが、今回は、建設省で平成3年に行われた植物調査による富士川現存植生図から植生分布を読みとり河道特性との関係を調べた。

2.植生別面積と河道特性を表す無次元量との関係

富士川上流部本川25kmと支川笛吹川の26kmを対象区間とした。富士川現存植生図から1km区間内の植生別面積(Ai)、現存植生域(ΣAi)を読みとる。河道特性に関しては次元解析による無次元量²⁾³⁾

$$\phi\left(\frac{B}{H}, \frac{d}{H}, Fr, Re, \tau_{*}\right) = 0 \quad [\text{文字・記号は慣用のものを用いた}]$$

のうち、砂州の形態にかかるB/H、流砂量に関する $\tau_{*} = \tau_{**}$ 、流況を知るためのFr、また河道の湾曲効果を考える意味で $1/r$ の4つの無次元量を用い、富士川現存植生図(平成3年)、富士川河床材料調査(昭和61年3月)、流下能力調査(平成4年 釜無川 平成3年 笛吹川)のデータと富士川水系計画高水量配分をもとに1km区間平均の値を求める。図-1(a)(b)、図-2(a)(b)は、それぞれ釜無川、笛吹川における植生別面積(Ai)と無次元量との関係の例を示す。

図-1(a)、図-2(b)によれば、荒れ地草本植物群落や川辺樹林の面積は無次元量($\tau_{*} \cdot 1/r$)が増大すると減少し、減少すると増大するほぼ反比例の関係が成立つ。図-2(a)から、つる性植物群落は中・下流域のB/H 3.0~5.5で繁茂することがわかる。図-2(b)で、低層湿原草本群落にはツルヨシ、ヨ

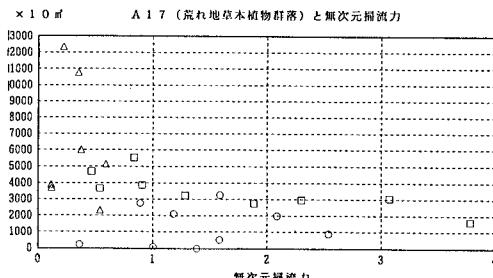
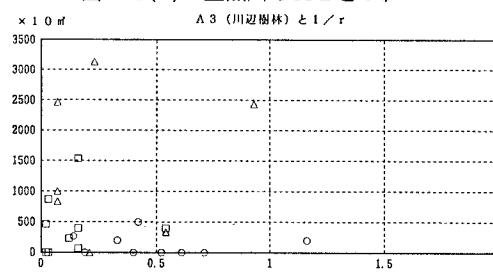
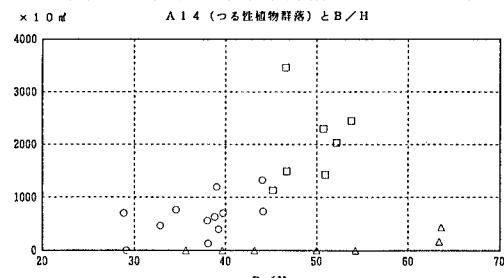
図-1(a) 釜無川のAiと τ_* 図-1(b) 釜無川のAiと $1/r$ 

図-2(a) 笛吹川のAiとB/H

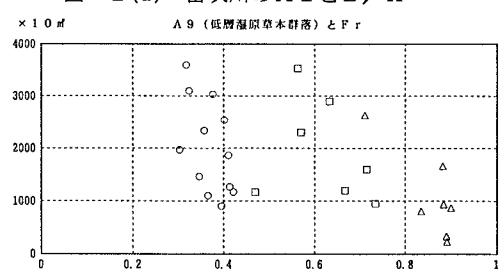


図-2(b) 笛吹川のAiとFr

表-1 釜無川のA*i*と無次元量

	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	A ₇	A ₈	A ₉	A ₁₀	A ₁₁	A ₁₂	A ₁₃	A ₁₄	A ₁₅	A ₁₆	A ₁₇	ΣA
F _r	x	x	o		x	x	x	△	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
B/H	x	△	o	x	x	x	△	x	o	x	x	x	x	o	x	x	o	x
τ_*	x	x	△	x	x	x	△	x	o	x	x	x	o	x	x	x	△	x
τ_{**}	x	x	△	x	x	x	△	x	△	x	△	△	o	△	x	x	o	o

† 指標 ◎・・・かなり関係あり
○・・・関係あり
△・・・はっきりはしないが関係ありそう
×・・・無関係

シ、オギの3つの植生が含まれ、上流域でツルヨシ、中流域でオギ、下流域でヨシが繁茂していることがグラフと現地の調査から分かった。

これら全体について関係の有無をまとめると、釜無川の場合は表-1のようになる。表-1からは、 $i = 3$ (川辺樹林)、9(低層湿原草本群落)、12(チガヤ群落)、14(つる性植物群落)、15(路傍草本植物群落)、17(荒れ地草本植物群落)、21(裸地)の関係が表れ、植種によって影響の受ける無次元量が異なる。

3. 現存植生域と河道特性を表す無次元量との関係

現存植生域(ΣA_i)と無次元量との関係については、昨年度の結果と比較する。昨年の ΣA_i は平成5年の春に高度300mで撮影した航空写真から読みとったもの、無次元量は昭和56年8月、昭和57年9月の台風時のものを使っているために値は異なっている。図-3(a)(b)から共通して考えられることはB/Hが小さくなると砂州の波高の増加で流路が安定し植生の繁茂機会が多くなり、 τ_* が小さくなると流砂量が少なくなるために現存植生域が多くなると考える。また、中流域において植生域が少ないので活発な流路の変化によるものと考える。

4. 大規模洪水と中規模洪水での植生への影響

富士川水系計画高水量配分の流量を大規模洪水、その半分の流量を中規模洪水としそれぞれ無次元量を求め植生別面積(A_i)との関係を調べる。2つのグラフを比較すると

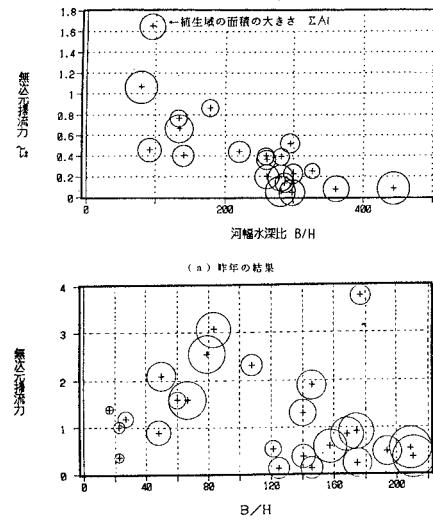
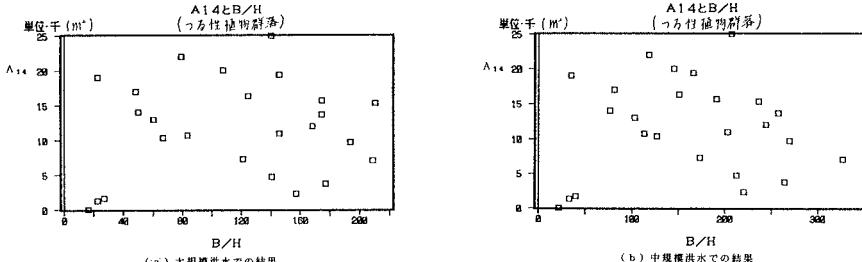
図-3 ΣA_i とB/H～ τ_* (釜無川)図-4 A_i と大規模洪水・中規模洪水でのB/H (笛吹川)

図-4(b)の方が A_i の分布が集まって関係が表れてきていることがわかり、比高の高い場所の植生は中規模洪水になると関係が表れにくくなり、比高の低い場所の植生は中規模洪水になると関係がはっきり表れてくるものと考える。これは、洪水規模と比高と植生の繁茂の間の関係を調べる必要があることを示す。

5. まとめ

以上の検討による主な結果は、1)河川植生の分布と水理特性を表す無次元パラメータの間には、植種によって異なる関係を示すこと、2)釜無川の対象区間中流部の植生域が少ないので、水理特性を表す無次元パラメータ τ_* とB/Hにより整理できること、3)洪水規模と比高と植生の間には何らかの関係があることなどがわかった。この結果を踏まえて、3)について詳細な検討を進めたいと考えている。

[参考文献] 1)久下・砂田: 土木学会年講, No.39, pp.206-207, 1994. 2)砂田: 土木学会論文集, No.363/II-4, pp.235-243, 1985. 3)砂田・桜林: 土木学会関東支部発表会概要集, No.14, pp.88-89, 1987.